

湯野正憲先生について

文責 増田三郎

湯野正憲先生は昭和17(1942)年に九段高校(当時の東京市立一中)に奉職され、定年退職の昭和51(1976)年までの35年間、一度も転職することなく九段高校での教育に尽力された。

湯野正憲先生が赴任された当時は、第二次世界大戦のため至大荘行事はやむなく中断されていた。しかし、九段高校教職員の献身的な努力により、昭和27(1952)年に1年生全員参加の夏季至大荘行事が復活し、その中心になられたのが湯野先生だった。(復活するまでのご苦労は至大荘手帳に記載されている)

湯野先生は復活当初から游泳部長を務められ、至大荘生活の退荘式で帰省する生徒たちに、自作の「ああ至大荘」と題する歌を独唱されるのが常だった。この歌には楽譜が無く聞き伝えて、歴代の游泳部長が至大荘生活の退荘式で独唱することが伝統になっている。「ああ至大荘」の歌詞は至大荘の「養気閣」に掲げられている)

湯野先生が定年退職された年に、野袴姿で九段高校の剣道場においてになって、記念写真を撮られた。先生の左肩に止まっているのはペットとして可愛がっておられたカラスである。(この写真は、法人九段に保存されている)

九段高校の生徒たちが湯野先生から受けた教養は多くあるが、大貫 暁先生が作成された一弦琴を爪弾きながら、湯野先生自作の「にんげん」と題する歌を口ずさみ、「人間が、人間としていかに生きるべきか」を度々説かれた。(湯野先生の音声はCDに保存されている)

湯野先生は晩年心臓病を患っておられたが、生きる希望と情熱は少しも衰えていなかった。昭和55(1980)年の夏、至大荘においてになり、「犬ヶ崎」の飛び込み台の上に立たれて大遠泳の隊列を見守り、泳いでいる生徒たちを「養・勇・講・礼」(勇気を養い礼を講じる)と大声で励まされた。隊列の生徒たちも「養・勇・講・礼」と大声で応えていた感動的な光景を鮮明に覚えている。

奇しくも、同年9月24日、日本武道館で行われた全日本剣道連盟主催の剣道合同稽古中に心筋梗塞で倒れられ、9月28日に64歳の生涯を終えられた。

ちなみに、湯野先生は剣道八段範士の日本剣道界の重鎮で、全国高等学校体育連盟剣道部の創設者であり、専門委員長・部長を永年務められた。このような生前の多大な功績に対し、天皇陛下から「勲五等双光旭日章」が授与されている。

以上